

初めてのリハーサル



“My First Rehearsal”

(1880)

私は当時のことを今から語ろうとしている。その頃はまだ青二才で、ロマンティストで、当然の結果として清貧に甘んじていた。そのことを前もって述べておきたい。私の勤め先でのポストはイングランド中部地方の州で開業していた事務弁護士のもとで働く職員だった。それは文字どおり高いポストだったので、すでに述べたロマンティックな側面が私の性格になかったとしても、そこで昇進できたかもしれない地位などは高が知れている。そうした不幸な性格ゆえに、私は若い頃から「月」というものに異常なほど魅了されてきた。この発光体に対して引力のようなものを感じ、口からほとぼり出るいくつもの情熱的な言葉で崇拜していたのである。私はまた、春陽^{スプリング}と脚韻を踏む言葉として真つ先に連想されるのは歌謡^{シンギング}だと知り、その事実^{オールド}に深い感銘を受けた。それで、仕事のために「サンザシに頌詩^{カプレット}、イバラに哀歌^{エレジー}」を寄せて作詩する余裕がなくなると、次第に訴訟依頼人の手紙の裏側に二行連句を書きなぐったり、インクの吸い取り紙の白いスペースに詩の警句で彩りを添えるようになった。しかし、さらに悪いことに、自分の想像力が生み出したものに幾分いや気がさし始めると、今度は他人が書いた詩文までも朗誦するようになってしまった。そういうわけで、いろんな野望で心が揺れていた私は、もう居ても立ってもいられなくなり、旅回りの一座が町にやって来たとき、「そうだ、役者になろう」と衝動的に決心したのである。これまでの貯金を計算してみると——いつも私はささやかな物にしか必要を感じない若者だったので——少なくとも十二ポンドにはなると分かり、小躍りして喜んだ。雇い主に退職の意志を伝えたのは、このことに力を得たからである。

このように自由の身になると、私はすぐ旅行用の大型カバンで荷造りし、下宿の女将さんおかみに清算してもらい、洗濯物の請求書の裏側には愛情と皮肉を半分ずつ込めて「さらば！」と書き、古い物語にあるように「膝栗毛にむち打つ」⁽¹⁾ ことにした。

私が華の都ロンドンに向かったことは言うまでもない。そこならば、間違いなく、度量の広い舞台監督がたくさん見つかるだろうし、大好きな劇から選んだ私の朗誦をいくつか熱心に聴いてくれ、すぐさま気前のよい条件で契約を結んでくれるはずだ。もし汽車の切符を買って南部行きの始発便に乗っていたなら、ほんの数時間で首都に到着していたかもしれないが、私は駅に向かう途中で別の妙案を思いついた。それは、あまり楽しい案ではなかったものの、少なくとも私のような年齢や気質の男がいかにも考えそうなことだった。わざわざ鉄道を使って行くなんて！ そうまでして、なぜ大切な旅から詩情を奪う必要があるのか？ これまで私は大きな将来の夢に誘われ、黄金で舗装されたというロンドン目指して旅立った若者たちの物語を数多く熱心に読んできたが、有名なデイク・ホイッティントン⁽²⁾ 以来ずっと、蒸気機関車に乗って上京した男がいたなどという記憶はない。この場合、おあつらえ向きのものがあるとすれば、それは駅馬車であるうが、悲しいかな、どこで見つけたらよいのか分からない。突然そのとき私の頭にひらめいた考えは、間違いなく実情にぴったり合うものだった。そうだ、ロンドンには歩いて行こう！ たった八十マイルの距離じゃないか！ てくてく楽しく歩いて行けば、おそらく三日で到着するはずの距離だ。ポケットには大枚二十ポンドが入っている。そう

考えると旅費などは取るに足らない問題のように思えた。ということ、私は貧弱な旅行カバンを手荷物専用列車で発送する前に、とりあえず着替え用の下着だけをルンルン気分で抜きとり、こうした場合に昔からよくするように、それらを包んでまとめ、頑丈な歩行用のステッキの先に結んで吊り下げた。

それは六月初旬のことだった。元気にてくてく歩くには少し暑かったけれど、実に素晴らしい快晴、天を仰げば雲ひとつない青空、自然の女神の顔からは千紫万紅の光彩が放たれていて、私の第一日目の徒歩旅行は足がずつと地に着かない感じであった。旅の疲れなどどこ吹く風である。森林と牧場の無数の香りを運ぶ微風そよかぜが時おり吹いて、むき出しの額に浮かんだ汗を吹き飛ばし、私の体はすべて喜びに酔いしれていた。そして、ついに一日も終わりに近づき、太陽がえも言われぬ美観を呈して沈むのを見ると、私はもよりの丘の頂上へと急ぎ、そこで自分でも信じられないほど情熱的な声で、マンフレッドによる太陽への崇高な呼びかけをやつてみた。その時の状況には似つかわしくなかったけれど、私は最後の詩行までも朗誦してしまった。しかも、感情を込めすぎて半分むせんだような声で。

さらば！ 再び汝の顔を見ることはあるまい
我が愛と驚嘆の最初の視線は汝に向けられた
それゆえ我が最後の眼差しもまた受けてくれ

汝が照らす人間で、汝の生命と暖気の賜物に

我以上に致命傷を負った者は一人もおるまい⁽³⁾

私の声の最後の余韻が夕暮れの静けさの中で消えるやいなや、突然の拍手の音と「いいぞ、いいぞ！」と繰り返される称賛の声にハッとさせられた。私は西の空よりも顔を赤らめながら、いったい誰が狂気じみた朗誦を立ち聞きしていたのかと思い、すぐさま振り向いた。すぐ後ろに立っていたのは地味な黒い服を着ている老紳士であった。髪はやや白っぽく、きれいにヒゲをそった顔はシワだらけ、眼鏡越しにきらめく目の表情は全くもって慈悲深いものだった。もっとも、微笑で口元がほころびる時は、間違いなく、ふざけたような陽気さも少し見てとれた。要するに、この男の外見は私を大いに安心させたわけである。私は馬鹿なことをして恥をかいたわけだが、それが年齢の近い人の前、あるいは——考えただけでも、ひどく恥ずかしくなるが——若い女性の前でなかったので、心の中で思わず神様に感謝した。私は落ち着きを少し取り戻すと、それなりのお辞儀をしてから素早く退散しようとしたが、ちょうどそのとき老人が「ちよつと待たれよ！」と言って、私の方へ手を伸ばしながら近寄ってきた。

「君は気づいてないじゃろうが、わしは思いがけず楽しませてもらったよ。そのことには少なくとも感謝せにゃいかんな」と、その男は紳士然とした愛想のよい口調で言った。「素晴らしい出来でしたぞ。実に素晴らしい出来栄じゃった。こうしたことにかげちゃ、わしはちょ

つとした目利きだと言ってもよい。ポロニアスの言葉を借りるなら、『まことに、みごとな話し方、口調もよければ、判断力も素晴らしい』⁽⁴⁾ かな？」

これらが間違いなく表裏のない賛辞であるばかりか、その口調や言葉づかいによって批評能力があると即座に分かるような御仁から発せられた賛辞でもあったので、私がどんなに喜んだかは言う必要もあるまい。私は前よりも一段と——そんなことが可能であれば——顔を赤らめ、口ごもりながら何か謙遜めいたことを必死に述べたが、そんなことはない相手とすぐ否定されてしまった。

「徒歩旅行をなさっておいでのようじゃな」と、彼がこちらのステッキと包みを見て言ったので、私はそうだと答えた。

「それじゃあ、おそろく」と彼は続けて言った。「今晚はH——町にお泊りですか」

H——町というのは半マイルほど離れた場所で、今まさに私たちがいる小高い丘から見下ろすことができた。実際、そこで一泊するつもりだったので、私はそう答えた。

「そうかね！　じゃあ、そこまで御一緒にさせてもらいましょう。わし自身、まだ短い期間じゃが、そのH——町に住んどるんじゃよ。ここからだ、とても近く見えるじゃろ？　夕暮れの美しさに誘われて、わしはちよつと散歩せずにはおれんですよ。では、さっそく出発することしよう。『西の空にはまだ幾筋かの陽の光が輝いている』⁽⁵⁾ ようじゃな」

眼下に見える街道では、たまたま丁度そのとき、馬に乗った人が町に向かって進んでいた。

私は、自分の学識と機知^{エスプリ}を示すために、すぐさまその機会をとらえ、眼下を指さしながら笑みを浮かべて大声で言った――

行き暮れた旅人は拍車を入れて急いでいる

折よく見つかった旅館へ向かうべく⁽⁶⁾

新しい友の老紳士は大いに喜んで「結構、結構！」と叫んだ。「これは、これは！ 舞台上に立ったことがないなんて、とても信じられませんぞ！」

私は顔を紅潮させながらも、「何としても舞台で自分の運を試したいと思つてますが、実際はまだ一度も舞台を踏んだことがないんです」と、控えめな口調で答えた。しかし、相手の優しそうな顔を見て急に自信が出てきたので、「実は今まさに契約を求めてロンドンへ行く途中なんです」と言い添えた。

「ロンドンですか、お若いの！」と、老紳士が声を大にして言った。「まだまだ長い道のりですな。それじゃ、(ずばずば言つても許してくだされや――よかれと思つてのことじゃから) 契約をもちょうのに少し時間がかかるかもしれないな。例えば、何週間か身銭を切つて生活させにやならんかもしれんということは、しっかり考えなすつたかね？」

この知り合つたばかりの老紳士の言動には実に親切で、実に思いやり深いところがあつた

め、私は若さゆえに感極まって、その善意に報いたいと思わずにいられなかった。要するに、微妙な問題ゆえに多少ためらったものの、「私は素寒貧すかんびんに見えるでしょうが、実はそうではなく、節約生活の結果、二十ポンドばかり持ってます。そのことからもお分りのように、歩いて旅をしてるのは必要に駆られてではなく、全くの気まぐれからなんです」と言ってしまったのだ。

このように言われて老紳士は本当に嬉しそうな顔をした。彼は若い野心家に共通する性格とは相容れない私の思慮深さに驚き、「道中はできるだけ儉約をしなされ」と私に勧めてきた。「わしが思うに」と彼は続けて言った。「君は華の都でデビューしようと決意してるんじゃないかな？ 地方の劇場と契約するなんてことは望んでおらんと思うが、いかがかな？」

この相手の態度には、なぜか分からないが、何か人の心を動かすものがあって、彼自身どうやら舞台関係者らしいと、私は知らないうちと思うようになっていた。老紳士の最後の言葉はいくらか力を込めて発せられたので、私は彼に見つめられていたこともあって、ありとあらゆる期待を抱いてしまった。それで、「地方の劇場との契約については考えたこともありませんが、万一そうした契約を提示されたら、無論それを拒むような馬鹿なことはしません」と答えた。

「そうじゃろう。極めて分別のある決心じゃよ、お若いので、わし自身がそうした契約のお手伝いができるとしたら、いかがかな？」

「感謝感激ですよ！」と私は大声で返答した。「そういうことを恐れ多くも期待してよいのでしょうか？」

慈しむような笑みを浮かべてから、突然、老紳士は道端で立ち止まり、私の手をつかんだ。

「わしならできると、そうしてあげるつもりじゃ」と彼は熱心に言った。「若者の天分を見つけて出し、それが発揮される機会を与える手助けとなるなら、それ以上の喜びはあるまい。実は、これまで君のことを試してたんじゃが、あの太陽への呼びかけを聞いた瞬間に、君が舞台を仕事として考えるようなら、わしはできるだけ援助してやろうと、もう決めとつたんじやよ。君、あー、その、お名前は何ですか？」

「リチャード・モートンです」と私は答えた。

「モートンか！ よい名前、よい響き⁽⁷⁾じゃ。リチャード・モートン君、わしは自分がロンドンのとある劇場の監督だと言おうとしてたんじやよ。今は、そのロンドンの劇場が修復・増築中なんで、選り抜きの一座の者たちと旅をしとるところだね。明日の夕方はH——町での短期公演の初日でな、そこでの舞台はさしあたって職工会館⁽⁸⁾を使うことになつとるんだ。このあたりに住んぐる有力な田舎紳士連中のたつての願いがなけりや、H——町なんぞに長居することはないんじやが、わしのハムレット役を見たくてたまらんと言うもんだから……」

世間知らずにもかかわらず舞台と関係のあるものなら何でも夢中になっていた私にとつて、

これは文字どおり演劇の聖なる秘伝を授けられる儀式に他ならなかった。ここで私はロンドンの劇場の舞台監督と、しかもハムレット役で有名な俳優と、実際に親密な会話を交わしているのだ！ 喜びで心臓がどんなに打ち震えたことか！

「明日の夕方は」と彼は続けて言った。「いいいよ『ハムレット』の幕開きなんで、この時のために自分で述べようかと思って短い前口上を書き上げておったんじや。じゃが、その気ももう失せてしもうた——モートン君、君のせいだね。前口上は君にやつてもらうよ——ただ、君が不名誉だと……」

「とんでもありません！」と、私は興奮のあまり話をさえぎった。「感謝の言葉もありませんよ！ 前口上を述べるなんて、この上なく名誉なことです。今晚さつそく暗記することにしませう！」

「そうしてくださらんかと頼むところでしたぞ、マートン君」と、舞台監督が口を差しはさんだ。「初心者な、自分の台詞せりふをいくら完璧なものにしても、しすぎることはないからな。それから、H——町のことは何も知らんのじやろう？ 泊まる旅館はもう決めとるかな？」
いいえと私は答えた。

「じゃあ、わしらの旅館まで一緒に来てくださらんか？ そこですぐ前口上を練習してもらうことにしよう。そうして、床に就く前にリハーサルをしようじやないか。よろしいかな？」
無論よくないことなどあろうはずがない。就寝前に諳そんじなければならぬのが単なる前口

上ではなく、ハムレットの台詞すべてだったとしても、喜んで引き受けていただろう。

私たちは今まさにH——町に入ろうとしていた。消えゆく夕暮れの街路に沿って歩いているとき、最初に私の目をとらえたものは壁に貼り付けられた大きな黄色いポスターだった。それには、翌日の夕方七時三〇分きっかりにシェイクスピア劇の『ハムレット』が職工会館で開演すること、ハムレット役はジュリアン・ブラッドフォード氏であることが告知されていた。私が目を皿にして貼り紙を見ていると、舞台監督もその前で立ち止まった。

「あなたが——あなたがジュリアン・ブラッドフォード氏なんですね？」と私は息を潜めて尋ねた。

この新しい旅仲間はお辞儀をし、愛想よくほほえんだ。私たちはもう少し先まで進んでから、小さな建物の前でまた立ち止まった。正面には「職工会館」という文字が見えた。

「ここがわしらの劇場じゃよ」と舞台監督が言った。「すまんが、モートン君、ちょっとここで待っててくれんかね？　ほんの少しの間だ——大事な用件をふと思ひ出してな。すぐに処理せんといかんもんで……」

彼はサッと建物に走り込み、数分ほど姿を消して、また出てきた。それから私たちは再び歩きだし、やつのことで少々みすばらしい宿屋に到着した。さっそく中に入り、私は部屋を一つ求めて確保し、そこに手荷物の包みを置いてから、ブラッドフォード氏と一緒に軽い夕食をとるために喫茶室へ降りて行った。食事中ずっと喫茶室には私たちしかいなかったのも、彼の

温和な——事実、明朗活発と言つてもよい——性格ゆえに私の気分も最高潮に達した。私は空腹を満たすのを忘れてしまうほど、すでに両手に持っていた前口上に取りかかりたくて仕方がなかった。それは三十行あまりの前口上で、フルズキヤップ版⁽⁹⁾の半紙に美しい書体で書き写されていた。

「さて、モートン君」と、舞台監督は食卓を離れてから、葉巻に火をつけながら言った。「わしの忠告に従い、すぐ部屋に戻ってくれたまえ。いつ知らない奴がここに来て、君の邪魔をするか分からんからな。それで——えーっと、今、九時半か。じゃあ、十時半きっかりに君の部屋の扉をノックさせてもらうことにしよう。たぶん、そのあとなら君もわしの前でリハーサルできるじやろう。ちよつと厳しすぎるかね？」

「とんでもありません！」と私は大きな声で答え、すぐに自分の部屋へと退いた。一時間もしないうちに私の前口上は完璧な状態になった。待ちに待ったノックの音がすると、私は急いで扉へと向かった。ブラッドフォード監督はいつものように情け深い笑みを浮かべながら入ってきた。両腕に包みをかかえていたが、それは一そろいの古着のように見えた。

「準備はいいかね、モートン君？ まあ、ホントに君は暗記するのが早いね、嬉しいよ。ところで、異存がなけりゃあ、一つお願いがあるんじゃないか？・・・今そこに着てる服を脱いで、わしが持ってきたものを着てくれんかね？ もちろん、これは実際に舞台で着るもんじゃないが、何か舞台衣装のようなものを着てリハーサルしてもらうのが、いつもの決まり事なん

じゃよ。舞台衣装の感覚に慣れるという意味で、特に新人さんに必要なことなんだ。新人さんの注意が最初のうちは舞台衣装にそらされるのをよく目にしてきたからな。異存はないじゃろうね？」

「ありませんよ、もちろん。そういった方針の利点はよく理解してますから。ほら、衣装はぴったりです」

私は鏡で自分の姿を見たが、実際はややグロテスクな風采だと思った。ひどく情けない、まがい物の金のレースの面影を残した、十八世紀の図柄の入った、長いコートを着ていたのである。また、だぶだぶの白いズボンは大層すり切れており、たぶん以前は船乗りが着ていたものだろう。だが、見かけなんてどうでもよいではないか。重要なのはそれをどう感じるか——それだけだ。

「それで、もしよけりゃ」と、ブラッドフォード氏は続けて言った。「わしの部屋へちよつと来てくださらんか？　ここより大きいし、立派な姿見もあるから、役に立つかもしれない」

すぐに私は彼に従って下の階まで行き、ずっと素晴らしい部屋に入った。ブラッドフォード氏が肘かけイスに座り、注意深く拝聴する準備をしてくれたので嬉しかった。心臓がドキドキして、最初は声が出るかどうか心配だったが、すぐさま私は右手を上げてリハーサルを始めた。

古代ギリシャのテスピスが史上初の舞台にて⁽¹⁰⁾

愛や怒りを真似る技を最初に披露したとき

観客すべての心をいかに酔わせたことか

その声にて人間の友愛を教えることで

ちょうど私が第四行目を終えたとき、部屋の扉をノックする大きな音が聞こえた。舞台監督はムツとした表情で立ち上がった。

「クソつたれがー」と彼は叫んだ。「プライバシーも何もあったもんじゃない！ ちょっと失礼するよ、モートン君」

彼は扉の所へ行き、外にいる誰かとしばらく話してから、こちらに戻ってきた。

「イライラすることこの上なしじゃ。契約してる俳優について、ちょっと問題が生じたみたいだ。仲間の一人が下に来ていて、わりに会うと言ってきかんそうじゃ。五分ほど失礼してもよろしいかな？——どうか座ってくれたまえ——君の出だしは実に素晴らしかった。クライマックスの部分を早く聴きたくてたまらんよ——今日の新聞でも読んでくれ——長くて五分じやから！」

ひとり残された私は新聞を手をすることなく、すぐに鏡を使って自分の仕草を微調整しながら、自分だけでリハーサルを再開した。懐中時計は残りの衣服と一緒に自分の部屋に置いて

きたので、時の経過を確かめる手段はない。しかし、前口上の練習を五回か六回ほどやると、舞台監督の言った五分がやけに長すぎるように思えてきた。それでも彼が戻って来ないので、きもきさせられ、とうとう私はそつと部屋扉を開け、廊下をのぞいてみた。宿屋の中は暗くて静まり返り、まるで全員が寝込んでしまったかのようだった。私は階段の上へと移動した。下の階は明かりがついていた痕跡さえない。何時頃だろうか？ 確かめるためには、ローソクを手に持って、上の階にある自分の部屋まで行き、懐中時計を見るしかない。どんな人であれ、奇妙な服をまとった私の姿を見て驚くとまずいので、そつと歩きながら階段を上り、自分の部屋に入ってから背後でそつと扉を閉めた。

懐中時計はどこだ？ ちゃんとサイドテーブルの上に置いたはずである。それなのに——わーっ、なんてこった！ 服はどこに行つたんだ？ 全部なくなつてゐるじゃないか！ 不安で血が凍る思いをした瞬間に、有り金すべてをズボンのポケットに入れていたことを思い出した。もつと安全な場所に隠しておくことなど考えも及ばなかった。気が狂つたように部屋中くまなく探したが、何も見つからない。私は奇妙奇天烈な身なりなど気にも留めず、すぐさま「泥棒だ、泥棒だ！」とできるだけ大声で叫びながら、暗闇の中を階下へと駆けおりた。たちまち階下では大騒ぎとなり、夜遅くまで起きていた宿屋の亭主が手にローソクと火かき棒を持って、小さな裏の居間から飛び出してきた。

「どうしたんじゃないね？」と亭主は声を荒げて言った。「どこだね、泥棒は？ 一体全体、あの

音は何ですかい？」

「誰かが私の部屋に忍び込んだみたいだ！ 服も、お金も、懷中時計も、全部なくなってる！」

宿屋の亭主が私の変てこりんな身なりに驚き、どなたですかと尋ねてきたので、私はブラッドフォード氏の一座の者だと答えた。

「ブラッドフォード氏ですと？ 何・ブラッドフォード氏じゃね？」と彼は言った。私たちが話し合っていると、驚いて集まりだした他の人たちからも、いろんな質問をされた。

「もちろん、ジュリアン・ブラッドフォード氏ですよ」と、私は力を込めて答えた。「劇場の舞台監督で——上の階に部屋をとつてゐる老紳士ですよ」

「何ですと？ あの俳優さんですかい？ なんてこった！ 今朝ここに来なすつた時は、スミスつて名乗つておりやしたよ。あれは俗に言う仕出しの端役男優⁽¹⁾か、そんなところですよ。あれをホントに舞台監督だなんて思いなすつたんかね？」

ある恐ろしい疑念が心に生じ、私は口もきけなくなつた。ここで宿屋の給仕が急に口をはさみ、実は私たちが話している男に頼まれて、きつかり十一時十五分前に私の部屋の扉をノックしたと言つた。この給仕はノックした直後に、その俳優が包みを脇に抱えて宿屋を出ていくのを見たようだ。給仕は、遅い時刻にもかかわらず何か仕事のことで呼び出されたのだらうと思ひ、この件に関しては誰にも話さなかつたようである。

「それじゃあ」と宿屋の亭主が言った。「そいつは高飛びしやがったんだ。間違いねえ。食事も踏み倒されちまった。旅一座の俳優とばかり思つて安心してたんだがなあ。お前さんの持ち物をすべて盗んでとんずらしまつたのは間違いねえな」

私の奇妙な身なりだけでなく窃盗の興味深い経緯もあつて、様々な質問が矢継ぎ早に飛んできた。私が恥ずかしながら事の顛末をすべて話したので、宿屋の亭主は心から同情してくれ、それまで自分自身の損害に対して真剣に怒つていたにもかかわらず、腹を抱えて笑わずにおれなかつたようだ。

この事件については、当たり前だが、できることは何でも直ちに実行しなければならなかつた。私は情けない外見を隠すために厚手のコートを借り、すぐに宿屋の亭主に付き添つてもらい警察署へ向かつた。そこで与えることができる情報はすべて伝えてから、私たちは非常識な時刻にもかかわらず本物の舞台監督を訪ね、例の男が飲酒癖と不実ゆえに今朝クビになつたばかりだと聞かされ、すべて得心が行つた。この本物の舞台監督は激怒していたが、私が経験したことに同情しながらも、やはり笑いを禁じえないようであつた。

慈悲深く見えた老紳士はうまい具合に逃げてしまつた。そう言わねばならないのは残念だが、それ以来ずっと彼の姿は見えない。みじめな状況から私がいかにして抜け出したかについて長い話になるので、ここでは本物の舞台監督ジュリアン・ブラッドフォード氏は残念ながら私の天分が発揮される機会を与えてくれなかつたと言うだけで十分だろう。つまり、あれ

ほど気合いを入れて練習した前口上を述べる機会は一度もなかったのである。

【訳注】

- (1) 十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』（1802-14）の「膝栗毛」とは、膝を栗毛の馬の代わりにして徒歩で旅行すること。「膝栗毛にむち打つ（set forth on my travels）」という表現は、リチャード・フオードの『スペイン旅行者の手引き』（*A Handbook for Travellers in Spain*, 1845）でも使用されている。十九世紀中葉にはヨーロッパを旅する英国人の数が激増し、この本をはじめ大陸旅行者のための手引き書を数多く出版したマレー（John Murray）は近代的な旅行ガイドブックの始祖とされる。
- (2) 黄金で舗装されているというロンドンに上京して大成功を収めた人物の伝承としては、十三世紀頃からある「ディック・ホイッティントン」が有名。詳しくは「高すぎた代価」の訳注(1)を参照のこと。
- (3) 出典はバイロン（George Gordon Byron, 1788-1824）の詩劇『マンフレッド』（*Manfred*, 1816-17）の三幕二場。愛する人を失ったマンフレッドは鬱々として世界を放浪する孤独な人物で、アルプス山中で死の問題に立ち向かい、夕暮れ時の太陽を擬人化した呼びかけ（*apostrophe*）を行なう。
- (4) 出典はシェイクスピアの『ハムレット』（*Hamlet*, 1600）二幕二場。ポロニアスはハムレットが愛するオフィーリアの父で、子煩悩な饒舌の重臣。
- (5) 出典はシェイクスピアの『マクベス』（*Macbeth*, 1605）三幕三場で、国王の軍隊の將軍バンクオウ

を殺すためにマクベスが雇った刺客の言葉。

(6) 出典は『マクベス』三幕三場で、訳注(5)に続く刺客の言葉。

(7) モートン(Morton)は古英語で「荒野の町(town on the moor)」の意。

(8) 職工会館(Mechanics' Institute)は職人や熟練工に教育の機会を与える目的で一八二〇年代から十九世紀半ばにかけてイギリス中に創設された。ロンドン地区では一八二三年にロンドン職工会館(現在のロンドン大学バークベック校の前身)が設立されてから数年以内に十八校まで増えた。

(9) フールズキャップ(Foolscap)は、とさか、ロバの耳、鈴が付いた道化用の円錐形の帽子で、もともととフールズキャップ版の紙にはそうした透かし模様が付いていた。紙のサイズは一七×一三・五インチ。

(10) イカリアのテスピス(Thespis of Icaria)は紀元前六世紀のギリシャの伝説的な悲劇詩人で、酒神バックス(Bacchus)の熱狂的賛歌であるディテュラムボス(dithyramb)合唱歌の中へ初めて対話と独白の形式を導入し、劇の俳優として舞台に立った最初の人物と言われている。

(11) 仕出し男優(walking gentleman)とは演劇用語で「演技よりも見かけがよいのが身上の端役」のこと。

